

ソウル歴史散歩

(露梁津から永登浦へ)

露梁津（ノリヤンジン）水産市場で夕食

足立 龍枝

—数年前の話から—

大阪の友人2人と、会食することになった。

場所は、ソウル市内、漢江（ハンガン）の南側にある韓国最大の「露梁津水産市場」。

朝から頭の中は、ヒラメの造りとエビの塩焼きがかけめぐる。

集合場所は露梁津駅改札口（数年前は、地下鉄1号線のみの駅だったが、現在は1・9号線の乗換駅となり、昔の面影はない）。6時に合流。

この駅周辺は予備校が集中していることで有名だ。「ハグォン（学院。）」と書かれた看板が雑居ビルに並んでいる。2人の話では、東京の代々木と同じですよと。

学院の間にファーストフードやカラオケ店の看板が見え、若者が溢れかえっている。

水産市場は予備校とは反対側で、以前は跨線橋を渡ると市場に通じていたが、新駅は駅の外へ出て、地道をくぐる。

地下道の出口の正面は、新しい水産市場（現代化市場と言っている。地下2階・地上6階）

そして、右側が元々の水産市場（伝統水産市場という）

今年8月では1割ぐらいが新市場へ移転。10月には3割に増えている。2階のギャラリーから見ると、全体がよく見える。～以下は数年前の風景だが、そつくり新市場へ移動したと考えるとよく似ている～



注文は先ず「ズワイガニ」から。大きいのが4万W、次は「ヒラメ」これも大を選んで2万W。ヒラメを造つてもらっている間に「エビ」を買う。中ぐらいのが8匹で1万200W。ヒラメの骨や頭をビニール袋に入れてもらい、「ヒラメ」を造ってくれたアジュモニに付いて2階の食堂へ。そこで食堂にタッチする。

広い食堂は、サラリーマン風男性グループが圧倒的に多いが、土曜日だったせいかファミリーも見える。観光客は目に付かなかった。



こりこりとした「ヒラメ」の造りを食べ始めている間に、カニが茹であがってくる。

飲み物はビール中瓶が4000W（鍾路並み）、焼酎750ミリが3000Wだが、韓国人は断然焼酎が多い。

カニは日本のように身をほじくる道具がなくて、料理ばさみで足の横を切り取り、箸で身を出す。カニ味噌を焼酎に入れて飲むと美味しいと言うがたいしたことはなかつた。

タイミングよく、エビの塩焼きができあがる。焼き餃子のように8匹つながって焼き上がってくるのがみごとだ。美味しい。もう少し大きいのにもよかつたかな。



→ 10月の伝統市場



最後にヒラメの頭や骨がチゲになつて運ばれてくる。ご飯も食べて、〆めて11万6000W（1万4000円ぐらい）だった。（レートはほぼ現在と同じだと思う）

水産市場だからといって特に安いと言うことはないと思うが、全国の活き魚が集まっているので、漁港と同じぐらい新鮮だし、雰囲気がよかつたかななど満足できた夕食だった。～以上は、数年前に書き溜めていたものを使ったが、2階の食堂はすべて新市場の2階へ移転完了している。まだ入っていないが、システムは同じ。刺身メインの食堂が多いと思った。

5

西隣の「新水産市場」が完成し、今年中に移転をと急いでいるが、まだまだ伝統市場の方が活気があって自然と足が向く。

移転が遅れている理由は、東京の築地とは全然異なり、老朽化により危険でもあったが、偶然同じ年に起こった出来事である。



← 10月の新市場の様子。

旧市場より1店舗あたりは少し狭く感じるが、エレベーターもあり便利できれいだと思う。



「死6臣歴史公園」



駅から東へ5分。ドラマ

「王女の男」(2011年に

韓国・KBSで放送された15世紀の李氏朝鮮を舞台にしたテレビ時代劇)その劇の舞台になったところ。

ソウル歴史散歩

永登浦（ヨンドゥンポ）を歩く①

～同期生 I 君の思い出より～

8月末、ソウルからチエジュへ国内線で移動した。座席は窓側と決まっているが、コースはいろんな条件で決めようがないので、その日任せ。

金浦（キンポ）を離陸してすぐ窓の下に、漢江（ハンガン）が見える。続いて陸地から狭い川で切り離されたような島の真ん中あたり、南北に長い広場がある。（金浦空港ができる前のソウルの空港）汝矣島（ヨイド）だ。

そして、汝矣島にくつつくように永登浦の街。目印は植民地時代工場地帯のトレードマークともいえる引き込み線だ。独特のゆるいカーブを描いている。今は車専用の道路になり、駅から少しはみ出して、引き込み線が延長した感じだ。飛行機の窓から実物大の鳥瞰図を見ているようで、あの時の興奮は忘れられない。

(← Iくんが通学していた永登浦小の現在)



小・中学校の同級生 I 君は、朝鮮生まれ、在朝日本人三世。朝鮮皮革会社の永登浦の社宅育ちという珍しいルーツ。終戦が小学校

(国民学校) 3年、10歳だから永登浦のようすを詳しく覚えている。1943年11月には家族旅行で汝矣島の空港から日本へ行ったそうで、学徒出陣の壮行会が神宮外苑で行われる日に出会えたという。雨降りのその日の様子を話してくれた。かなり珍しい体験をしていると思った。

朝鮮皮革会社は、永登浦の国策会社第一号として、1925年に設立された。工場内まで引き込み線が入り、皮革工場必需の水（井戸水）が確保されていた。皮革の原料移入や製品移出には鉄道が欠かせない。例えば製品をロシアに送るとき、引き込み線で永登浦駅を経由し、ハンガンを越えて、京城駅（ソウル駅）の手前「龍山（ヨンサン）駅」に着く。そこで貨物の組み換えをして、現在は鉄道が寸断されている京元線で元山（ウォンサン）へ



『創立 25 周年記念写真帖』朝鮮皮革株式会社、1936年 471 頁より

向かう。元山港から貨物船でハバロスクへ。そしてロシア国内に輸送される。皮革製品は、ロシアだけでなく、中国・旧満州へも送られた。

I君の話の中に、「引き込み線から見える学校…」「引き込み線に向かって左側…」など、植民地朝鮮では日常的によく使っていたことが分かる。

工場跡地を歩いていると、元昭和ビール（キリンビール系）の北側に広い公園がある。公園の入り口に2坪ぐらいの窓のない組み立てハウスがあり、ホームレス相談所と書かれているが、開いていたことがない。植民地工場地帯跡はスラム化したところが多いように感じる。



駅周辺にはホームレスの人たちが集まってる「トマスの家」という無料給食所がある。11時ごろから100人ぐらいが並んでいる。韓国は寄付や施しをする人が多い。

6年前、東日本大震災直後、ソウル駅前広場にテントが張られ、いち早くバザーが行われた。

また、参鶏湯の店

「土俗村」では横断幕に

「がんばってくだ

さい」という文

字。この時も

早かった。





永登浦を歩く②

ティータイムは
「コーヒーリブレ・五月の鐘」で

朝鮮皮革から始まった永登浦の工場建設は、1911年に公布された「朝鮮会社令」によって規制があった。1911年から1919年までに朝鮮半島で設立が許可された事業所は、日本企業180に対して朝鮮民族企業は36社に過ぎなかつた。

ところが、三・一独立運動が起こった翌年の1920年に会社令が廃止され、民族系資本に対する規制も緩和されると、朝鮮における企業活動が活発化した。会社設立も、1920年には朝鮮人が設立した企業の数は99だったが、1929年には362になつた。

といつても、日本企業に比べれば不利な立場にあつた。主要産業施設はほとんど日本企業が独占しており、民族資本は貧弱で技術面や経営面でも立ち遅れていた。

そんな中で成功したのが、三養社グループと和信商会グループだった。

永登浦の工場は、1936年の「朝鮮皮革創立25周年の記念誌」(前ページ)から見ると、13社が数えられるが、唯一、民族資本で設立されたのは、現在も続いている三養社グループの「京紡キヨンパン(当時京城紡織株式会社)だけだった。京紡は現在日本にも大阪支社がある。

仁川市江華島には、同じく民族資本(江華島の豪農地主 洪在默)による朝陽紡織が設立された。1960年まで操業していたが、今は撤去を待つのみとなっている。京紡より2年早い。

日本の紡績工場で働かざるを得なかつた朝鮮人女工たちの辛い日常が朝鮮に伝わり、朝鮮の親たちの願いが工場設立につながつたと考えられる。

『江華島に残っている

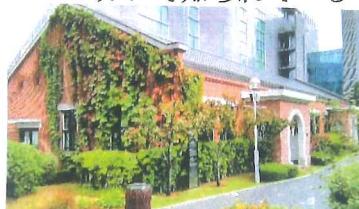
朝陽紡織の「ノコギリ

屋根』 2016年4月)



植民地時代、いかに紡織・紡績工場が必要とされていたかを証明するように永登浦には大工場が並んでいた。鐘紡・東洋紡・大日本紡績(ユニチカ)、そんな中に1社、京紡があつた。その事務棟が登録文化財第135号として保存されている。しゃれた赤煉瓦造り、内装の天井は木造。一見、日本式かと思ったがよく見ると違う。「洋風・木造トラス」という。先の朝陽紡織は、事務棟が木造日本式だったが、京紡はどこまでもこだわっていたのだろうと考えたい。

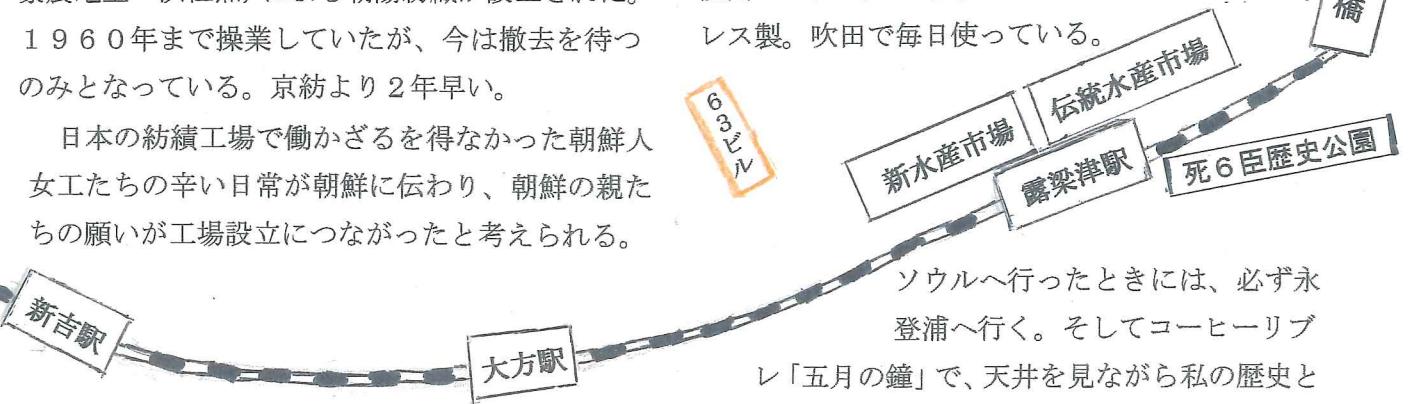
京紡の創設者・金性洙は、東亜日報社も設立し、高麗大学の経営も引き継いだ。この大学は、初めて民間の朝鮮人によって設立され「民族高大」のスローガンで知られているそうだ。(初めて知る)



保存されている事務棟の一階は、コーヒーショップ。天井が高く、広々として明るく、利用者が多い。100席は大丈夫。

4年ぐらい前に経営者が変わり「コーヒーリブレ・五月の鐘」と、名前も変わった。焼きたてのパンを買って、コーヒーは別にセルフで注文するシステム。すぐとなりが同じ系列の新世界デパート・タイムスクエアになっていて便利だ。

3年前が1周年記念だった。わずかに記念日を過ぎていたが、記念品のマグカップをもらった。仮面マーク(上の看板の写真参照)の赤色ステンレス製。吹田で毎日使っている。



ソウルへ行ったときには、必ず永登浦へ行く。そしてコーヒーリブル「五月の鐘」で、天井を見ながら私の歴史と全く同じ〇〇年間を想像して楽しんでいる。